

ちゃどうぐ 茶道具の「次第」

「次第」とは、古い茶道具とそれに附属する様々な物の総称です。松永コレクションの名品を、次第とともに展示いたします。

2020.2.4(火)-4.12(日)

会場：松永記念館室



福岡市美術館

〒810-0051 福岡市中央区大濠公園1-6
TEL 092-714-6051

・都合により展示作品を変更する場合があります。

出品作品リスト・作品解説

No.	作品名	員数	作者名・産地	時代	品質	法量 (cm)	所蔵番号
1 前期展示 (2/4-3/15)	あふたるとるまづ 芦葉達磨図	一幅	伝・因陀羅 (14世紀)	元時代 14世紀	紙本墨画	縦79.4 横31.1	6-B-7 (松永7)
[附属品]		<p>禅宗の初祖・達磨大師が一片の芦葉に乗ってインドから中国に渡ったという伝説に基づく作品。筆数を極限まで省略し、墨の濃淡で巧みに表現している。因陀羅は、伝記不明であるが、中国の開封の大光教禅寺に住したとされる画僧である。</p> <p>この掛軸の内箱を包む帙には、華やかな文様のインド更紗がぜいたくに用いられている。これは広島藩・浅野家伝来品に見られるもので、「浅野箱」と通称される。</p>					
[伝来]		<p>芸州浅野家…松永耳庵…福岡市美術館</p>					
2 後期展示 (3/17-4/12)	ぼたんず 牡丹図	一幅	伝・銭選 (1235頃-1301以降)	元時代 14世紀	絹本着色	縦31.2 横26.7	6-B-8 (松永8)
[附属品]		<p>見事に咲いた牡丹を精緻に描いている。内箱の蓋裏には狩野探幽 (1602-74)、狩野安信 (1614-85)、狩野常信 (1636-1713)、狩野養川院惟信 (これのぶ) (1753-1808) による4枚の極札 (きわめふだ) が貼られ、何れも宋末元初の画家・銭選 (字は舜拳) の作としている。出品No1と同様、「浅野箱」が伴う。</p>					
[伝来]		<p>芸州浅野家…松永耳庵…福岡市美術館</p>					
3	しのほうじゆこうこう 志野宝珠香合	一口	志野焼	桃山時代 17世紀	陶器	高さ4.1 径4.5	6-Ha-89 (松永165)
[附属品]		<p>宝珠にみたてられた本器は、文様の発色が濃く、各所にあらわれた火色も鮮やかで、小さいながら堂々たる風格である。内箱の包裂 (つつみぎれ) は、インド更紗 (丸紋模様) と和更紗 (亀甲文) を中央ではぎ合わせて仕立てたものである。</p> <p>外箱の蓋裏の墨書により、三井南家の旧蔵と伝えられる。越後屋 (現在の三越) を興した三井高利 (1622-94) を家祖とする三井家は、11家に分家したが、高利の六男・高久の家系が、本家のひとつである「南家」を継承している。</p>					
[伝来]		<p>三井南家…松永耳庵…福岡市美術館</p>					
4	こうらいわりこうだいちやわん 高麗割高台茶碗 めいしたば 銘「下葉」	一口		朝鮮王朝時代 15-16世紀	陶器	高さ8.6 口径13.8	6-Ha-59 (松永135)
[附属品]		<p>割高台とは、高台に切り込みを入れて割ったような形のものを用いる。その豪放な作風が武人に好まれた。楕円柱形の内箱の蓋裏には金泥で和歌が記される。中箱の蓋裏には平瀬露香 (1839-1908) が書きつけた貼紙があり、本器が藤村庸軒、「妙閑公」松平周防守康福 (やすよし) (1719-89)、そして「独楽庵」松平不昧 (1751-1818) と伝来したこと等を記す。なめし革の仕服には「正平六年六月一日」とある。この銘をもつものは「正平革」と呼ばれ、征西将軍懷良 (かねなか) 親王が正平6年 (1351) に肥後国八代の革工に染めさせたものと伝承される。</p>					
[伝来]		<p>藤村庸軒…松平康福 (妙閑公)…松平不昧…平瀬露香…松永耳庵…福岡市美術館</p>					

No.	作品名	員数	作者名・産地	時代	品質	法量 (cm)	所蔵番号
5	<small>こうらいあまもりちやわん</small> 高麗雨漏茶碗	一口		朝鮮王朝時代 15-16世紀	陶器	高さ8.7 口径15.4	6-Ha-60 (松永136)
	[附属品] ・仕服:石畳文ビロード ・箱:黒漆外箱、桐中箱、黒漆内箱 ・中箱包裂:草花文様更紗(ヨーロッパ 18-19世紀) ・内箱包裂:更紗裂継包裂(インド 17-19世紀)			飾り気のない素朴さをもつ高麗茶碗は日本人の「侘(わ)び」の美意識にない、愛好されてきた。その一種である「雨漏」とは、長年使用する間に釉薬の気泡や割れ目から水分が染み込み、雨漏りの染みのような景色を生じたものをいう。 本器には贅をこらした箱や仕服が伴う。内箱蓋裏の和歌、中箱蓋表の「雨漏」の字はともに江戸時代後期の大名茶人、松平不昧(1751-1818)の筆とされている。中箱を包む裂にヨーロッパ更紗、内箱を包む裂にインド更紗が用いられている。			
	[伝来] 平戸松浦弥…吉(芳)村観阿(白酔庵)…長尾欽弥…高梨仁三郎…松永耳庵…福岡市美術館						
6	<small>からもの る ていくちやいれ</small> 唐物驢蹄口茶入	一口		明時代 15-16世紀	陶器	高さ6.3 胴径6.7	6-Ha-52 (松永128)
	[附属品] ・牙蓋 ・御物袋 ・仕服:2点(透漆塗箱) 白地段替り草花文様錦(明時代 16-17世紀) 萌黄唐花宝尽青海波文緞子(明時代 16-17世紀) ・挽家仕服:有柄川類裂 ・箱:透漆外箱、黒柿中箱、透漆内箱、鉄刀木挽家			驢蹄口とは、口が驢馬の蹄(ひづめ)に似て大きく開く形をいう。仕服は2つあり、いずれも中国明時代製の名物裂である。内箱側面には「其日庵」と書かれた印が貼付されている。これは政治運動家、実業家であった杉山茂丸(号:其日庵)(1864-1935)の蔵印である。杉山は、松永耳庵を茶の湯に導いた人物の一人。昭和9年(1934)、茶の気のない耳庵に自動車一杯に積んだ茶道具を送りつけ、耳庵は翌年、それらの道具を使って初めての茶会を催した。			
	[伝来] 杉山茂丸…松永耳庵…福岡市美術館						
7	<small>からものかたつきちやいれ</small> 唐物肩衝茶入 <small>めい まつなが</small> 銘「松永」	一口		明時代 15-16世紀	陶器	高さ7.9 胴径6.4	6-Ha-51 (松永127)
	[附属品] ・牙蓋:3点 ・御物袋 ・仕服:3点(黒漆箱) 紺地龍雲芝唐草文緞子(清時代 18-19世紀) 大石畳宝尽文緞子 濃縹地飛鶴流雲緞子(江戸時代 18-19世紀) ・盆:若狭盆(三重箱、盆仕服1点、帛紗1枚) ・箱:桐外箱、茶入用に黒漆外箱、黒漆中箱、透漆中箱、透漆内箱、象牙挽家、挽家仕服 ・書付:3点(水鳥文螺鈿黒漆箱) 「小堀卿」(小堀十左衛門政孝)・「渡辺卿」(渡辺源藏カ)・「栗山卿」(不明)			「松永」の銘は、戦国武将で茶器名物の蒐集で知られる松永久秀(1510-77)の所持に由来するもの。 茶入本体は象牙の挽家(ひきや)に取められる上に、四重箱に守られている。また本器専用の盆として伴う若狭盆(唐物の漆塗盆の一種。四角形で、口縁が外側に反り、低い高台がつくのが特徴)は、三重箱に取められている。さらに両者を一緒に収納するために、茶入本体からは五重目となる大きな外箱が作られている。その大きさは、高さ36cm、奥行き58.5cmにもなる。			
	[伝来] 松永久秀…平瀬露香…戸田露朝(一玄庵)…松永耳庵…福岡市美術館						

【用語解説】

ちつ 帙	書物を保護するために覆い包むもの。紙、布、板などを材料とするが、厚紙に布を貼って作るものが多い。畳紙(たとうがみ)も帙の一種。
しふく 仕服	「仕覆」とも書く。茶入、茶碗、茶入の挽家(ひきや)などの道具類を入れる袋。それ自体が鑑賞の対象となるため、表地には錦、金襴、緞子(どんす)、更紗(さらさ)など華やかな裂が用いられることが多い。
さもつざひ 御物袋	「護物袋」とも書く。形状は仕服と同様であるが、茶器の保護のみを目的とする袋であって鑑賞の対象とならない点で、仕服とは区別される。
ひきや 挽家	茶入を保存するための容器。茶入に合わせた形に挽いて作る。材質は木地、漆塗の他、象牙などもある。
ふくさ 帛紗	「袱紗」「服紗」とも書く。本来は茶道具を拭き清めたり、釜など熱い物を扱う時などに使用するもの。器物を拝見する時、お茶をいただく時などに下に敷いて用いる。